炭鉱労働 過酷な実態

▲「太陽の光が入らない世界の美しさも感じてもらえるのでは」と語る小田監督

大阪で、あすから公開

小田香監督 ドキュメンタリー映画「鉱」

ボスニア・ヘルツェゴビナの炭鉱とそこで働く労働者をとらえたドキュメンタリー映画「鉱(あらがね)」が、10日から大阪・九条のシネ・ヌーヴォで公開される。

大阪府枚方市出身の小田香監督(29)が手がけ、昨年、山形、リスボン、台湾など各地で開かれた国際ドキュメンタリー映画祭で注目を集めた作品だ。

小田監督は、ハンガリーの鬼才タル・ベーラ監督が若手育成のためにボスニア・ヘルツェゴビナに創設した映画学校で3年間学び、卒業制作の被写体を探す中で、たまたま訪れた炭鉱に興味をかきたてられたという。

光がほとんどない炭鉱の中で、労働者が働く様子がうっすらと映し出される

地下300㍍まで坑道に潜っていく労働者。採掘重機の轟音(ごうおん)が響き渡る。ヘッドランプのわずかな光が、暗闇にうごめくすすまみれの肉体やツルハシを照らし出す。ナレーションは一切ない。音と光の対比が緊張感を演出し、過酷な労働実態を物語る。

同国は鉱物資源が豊富で、炭鉱業が盛んだ。映画では、現場で働く作業員が上司と「安全か、ノルマか」などと、口論を交わす一場面も織り込んだ。

「地元の労働者たちが炭鉱を支えているが、地中のガスや爆発などで、死者が出る現場。目の前で起こった激しいやりとりも、そのまま観(み)てもらいたかった」と小田監督は語る。

映画を撮るのは、「自分が理解できないこと、分かりたいことを知るため」だという。「見えないところで働く人がいる。異国の地下にこんな世界が広がっているんだと、映画を通して体感してほしい」

(青木さやか)